

グリーンパーク相談所だより 8号

2006年（平成18年）1月22日 発行

雪の日の梅の花 グリーンパーク日本庭園にて



桜に国花を譲った梅！

「東風吹かば、匂いおこせよ、梅の花」と言えば、大宰府の梅（飛梅十五代目）ですね。寒中に咲き、春を告げる花として愛されている『うめ(梅)』は古代(遣隋使、遣唐使によりもたらされた)中国より薬用として渡来したといわれています。(当時は白梅)

うめを庭園に植え、観賞するようになったのは万葉の人々であった。万葉集には百十八首詠まれており、さくらは四十四首にすぎない。高貴な香りは豊かな生活の象徴とされ万葉の人たちにとつて花といえはさくらではなくうめであった。

平安京の紫宸殿を最初に飾ったのは「左近の梅」であり、「左近の桜」は九百六十年の皇居炎上の後に植えられた。

うめという言葉は熟実(うめみ)から、あるいは中国から薬用として入った梅が「烏梅(ウーメイ)」と呼ばれたともいわれていた。

昭和の初めに国花を「梅と桜」どちらにするかと迷ったすえ「桜」が選ばれた。

※なお、若松にも飛梅にまつわる話が「極楽寺」に伝わっているそうです。

未熟な梅の実にはアミグダリン(青酸配糖体)という物質があり、酵素で分解されると青酸(シアン)を出します。これが中毒を起します。食べると危険な量は成人で三百個、子どもで百個です。とても食べられる量ではありません。実が熟すとアミグダリンが分解されて中毒の心配はなくなり耐漬けにすることで毒は分解されます。

植物の力 ～梅の実のパワー～



梅はクエン酸・リンゴ酸などの有機酸やミネラル、ビタミンを多く含んでいます。中でもクエン酸は疲労物質である乳酸を燃焼させ、疲労回復に効果があります。殺菌効果は古くから知られ、お弁当の梅干は大変理にかなっています。

わが苑に梅の花散る
ひさかたの天より雪の
流れ来るかも
大伴旅人

万葉集より

わが家の庭の梅の花が散っている。空から雪が流れてきているのだからか。

奈良時代の歌人であり、家持の父。大宰帥であったときに風流の宴を開き、その折に「梅花の歌」と題して詠んだうちの一首。
梅は外来植物で珍重されており、中国の習慣に従って梅花の宴が催された。
散る梅を雪に見立てている。雪の降る様と梅が散る様はどこか似ているように思われる。

ウメより早く、春真っ先に開花するロウバイは、グリーンパークの日本庭園に十数本植えられる、可憐な黄色い花からは、かぐわしい香りが漂っています。
一月中旬から二月にかけて、小さく蠟細工のような光沢があり、ウメに似た花を咲かせます。
この木の名前の由来は、ここから来たようです。

蠟梅

ロウバイ科
ロウバイ属
落葉中
原産国

